

レベル2.5

ぎん いろ いと
銀色の糸

文&絵:

Lian Luo / リアン・ルオ

JAPN1231 Tadoku Spring 2022

三十年前の中国の広州市です。ワンという若い男の人がいました。お金がなかったし、いい仕事も探せませんでした。小さくて狭い部屋にほかの九人と一緒に住んでいました。

もう夜です。ワンは今日もたくさん働きました。朝から昼までレストランでアルバイトをしたし、夜遅くまでデパートで店を手伝いました。とても疲れていましたけど、また

「寝られないなあ。」と自分に言いました。というのは、明日のことで将来のことを考えているからです。全然寝られないので、起きて、外へ出てちょっと散歩をしようと思いました。

実は、ワンの出身は広州市じゃなくて、福建省にあるとても小さい町です。町のみんなはたいがい貧乏なので、ワンは大きな広州市にお金をもらいに行きました。帰る列車の切符は高すぎるので、もう五年ぐらい帰らなかったんです。

ワンはいつもどおり川の隣（となり）の道（みち）なりに行って、何時間（なんじかん）もゆっくり歩（ある）きました。今の川（いまのかわ）は昼（ひる）の川（かわ）と違（ちが）います。とても静（しず）かで、星（ほし）と細（ほそ）い月（つき）の光（ひかり）が川面（かわづら）に映（うつ）って綺麗（きれい）でした。

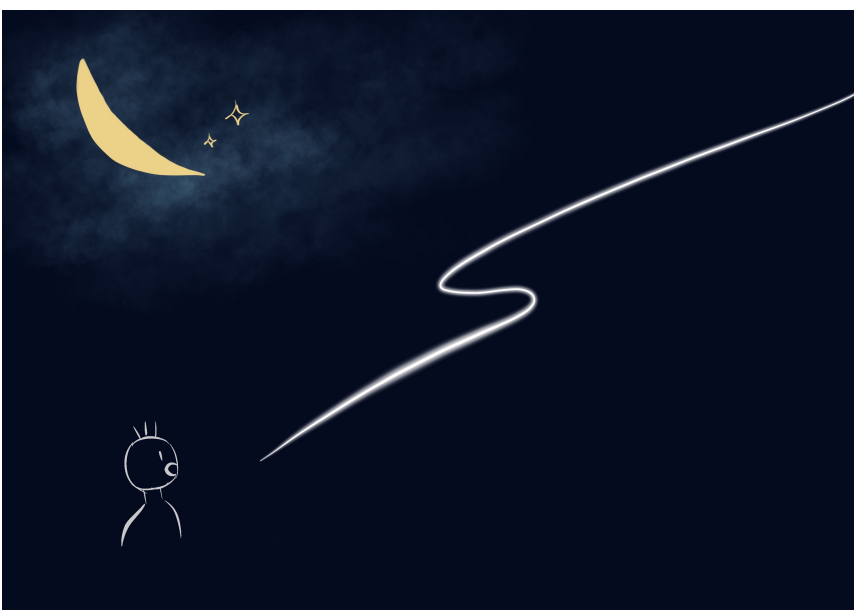
「父（ちち）、母（はは）、弟（おとうと）、家族（かぞく）のみんな、今はどうですか。私（わたし）は毎日（まいにち）頑張（がんば）って仕事（しごと）をするので、大変（たいへん）ですけど、仕方（しかた）ないなあ。」と考（かん）え
た時（とき）、急（きゅう）にお腹（なか）が空（す）いていました。

「ああそれはダメなんです、お金（かね）もないから、今（いま）食べ物（もの）を買（か）えないの。早（はや）く帰（かえ）って寝（ね）た方（ほう）がいいね。」ワンは早（はや）く走（はし）って部屋（へや）に帰（かえ）ります。

その時（とき）です。走（はし）りながら、急（きゅう）に目（め）の前（まえ）に細（ほそ）い銀色（ぎんいろ）の糸（いと）が見（み）えました。「なんだこれ」

ワンは走（はし）りやめて、その糸（いと）をよく見（み）ています。「変（へん）だな」と思（おも）いましたけど、まだ走（はし）り始（はじ）めました。「ま、多分（たぶん）私（わたし）は疲（つか）れすぎた。違（ちが）った違（ちが）った。」

でもその糸（いと）はまだワンの目（め）の前（まえ）にありました。ワンはちよつと困（こま）っています。そしてもう一（いち）度（ど）止（とど）まって、その糸（いと）を見（み）ました。



「ついに見ましたか。ワンさん。」どこからか老人らしい声が聞こえました。

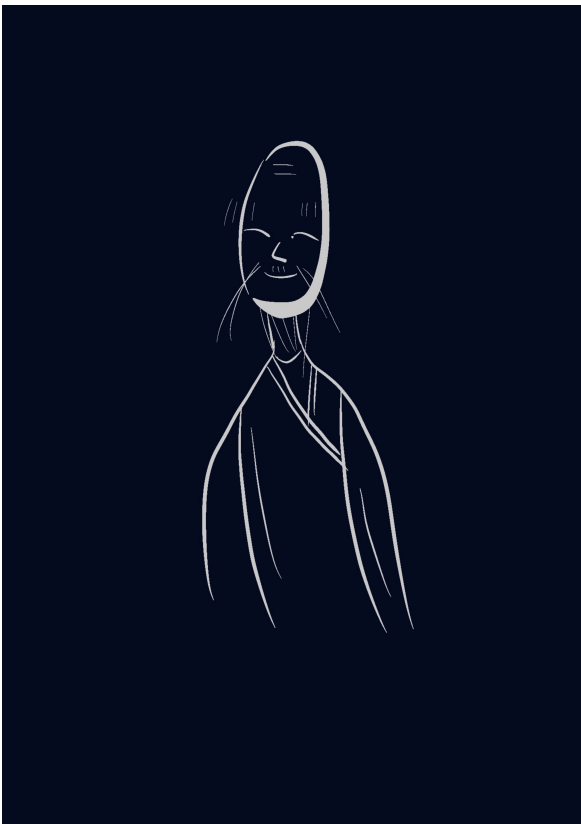
「へえ、だれ？どうして私の名前を知っていますか。」ワンはびっくりして、返事しました。

そして、道に一人のおじさんがゆっくり歩いてきました。

「私はあなたの守り神ですよ。知りませんか。人は死んだ後で、自分にお世話になった人の守り神になります。そしてずっとその人を守っています。」

「本当？」ワンは不思議にその神の方を見えています。

「ええ、そうだよ。あなたの生活はきつとその後でだんだん良くなりますよ。もうそんなに心配しないでください。まがせなさい。」



その神は古代の神らしい服を着て、ワンは信じました。「そうですか。それは本当によかったです。これからもうよろしくお願い
しますー!」

「ええ、じゃ明日もその時間にここに来てください。」神はまた消えました。

また夜です。ワンは昨日の約束を忘れないように同じところに行きました。神はもうそこにいました。

「その神は本当だ。」ワンは喜んで、小さい声で自分に言いました。

その後、ワンは毎晩神と会いに来ました。神はよくお金や役に立つ物や珍しい物をワンにあげます。そして二人はいつも遅くまで色々な話をします。年が違うけど、いい友達になりました。

ワンの生活もだんだんよくなって、お金がありました。そのお金を使って、新しく大きな家に住んでいるし、いい会社に勤めています。お金や物は全然いりませんでしたけど、また毎日神と会いました。

十年後の夜です。

「神はまだ来ませんか。それは変だな。神はいつも私より早いですね。「ワンがそう思った時、神は来ました。」

「すみません。今日はちょっと遅くなりました。」

「いいえ、全然大丈夫です。」

「実は私は今老人の神だから、体も弱くなりました。今晚の後で、恐らく会えません。」

「へえ、どうしてですか。神も死にますか。「ワンは悲しくなります。」

「ええ、そうですよ。あなたは本当にいい子で、ずっと頑張っています。だから、私はもう全然心配じゃない。」神は言った後で、すぐに消えました。

「待ってください！」「ワンはびっくりして、急に起きました。」

「ああ、よかった、夢ですね。ヤバイ、もうそんな時間です。神はきっと私を待っていますね。どうして寝てしまいましたか。私は遅いです！」ワンは急いで家を出て、一生懸命走りまわりました。

でもそこに着いた後で、神はいませんでした。ワンは神を探しますが、だれもいませんでした。

その時です。空から一つの糸で包まれた手紙が来ました。ワンはすぐにその手紙を読みました。

「ワ、先の夢のとおりで、あなたは本当にいい人です。私は今老人だから、もう手伝えません。これからもよく暮らしてくださいね。」

夢は本当です。神は来なかったんです。ワンの涙は月の光でキラキラしました。地面の上に老人の銀色の髪だけがありました。



何年間なんねんかん後あとで、ワンも老人ろうじんになりました。ある日ひ、ワンは体からだが痛いたくなって、寝ねられませんでしたから、老人ろうじんの神様かみさまが死しんだ後あとで初めてはじめて夜遅くよるおそ家いえを出でました。長い時間ながじかん歩いて、最後さいごに老人ろうじんと初めてはじめて会あった川かわに着つきました。

ワンは長くなが川かわを見みながら、色々いろいろな思おもい出だしました。

「コンコン」ワンは急きゅうに咳せきが出でて、体からだもとても弱よわくなりました。「もうダメかな」ワンは目めを閉しめました。

その時ときです。

「ああ、そこのおじいさん！大丈夫だいじょうぶですか。」古ふるくて汚きたない服ふくを着きた若いわか一人ひとりの男おとこの人ひとがワンの方ほうに走はしりました。ワンはちよつと目めを覚さましたけど、とても疲つかれていました。

「おじいさん、家いえはどこにありますか。家族かぞくの電話番号でんわばんごうも教おしえてください。早はやく家いえに帰かえるのがいいですよ。もうそんなに遅おそいですね。」若い人わかたすの助たすけで、ワンは家いえに帰かえりました。

そして、その夜にワンは夢を見ました。ワンは天堂みたいな場所にきました。その場所の門に銀色の糸がたくさんありました。神と最初に会った日の糸と同じでした。

「ワンさん、来ましたか。」天使のような女の人が来ました。

「はい、この糸が多いんですね。」

「ええ、それは前の守り神達が使った糸ですよ。銀色は綺麗でしょう。その糸を使ったら、人間の注意をひきます。」
そして女の人は銀色の糸を二つワンにあげました。

「これはあなたの糸です。それを使って前あなたを助けた人を助けてください。」

「ええ、わかりました。」そしてワンはその糸をしっかりと持って、さっきの若い男の方に行きました。

